

昭和二十六年六月十五日発行(毎月一回・十五日発行)  
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

(通第二十七号)

目 佛かねてしろしめして……………花田正夫 (1)

歎異抄八・九章講話(三)……………福島政雄 (3)

隨 想 断 片……………故・安波勲八 (8)

次 六 牙 の 白 象……………シャータカ物語 (11)

慈

光

第三卷・第六號



# 佛かねてしろし召して

花田

正夫

先日「聖徳太子讃仰」の福島先生の著書を拜読して非常に驚ろかされたことがある。それは太子の十七條憲法の第十條の「共に是れ凡夫のみ」の有名な一句について、先生は次のやうに述べ居られる。

「太子は常に八地以上の菩薩の境涯を目ざし給うてゐるのであるが、八地以上の菩薩の境涯といふものは、凡夫の自覚である。吾も一人の凡夫に過ぎない、といふのが八地以上の菩薩の自覚である。

この自覚に立つが故に「衆流に冥合して更に異趣なし」といふ世界がひらける。太子はこの御自覚を根本にしておいでになるから「共に是れ凡夫のみ」と仰せられてゐる。また「衆と共に同じくおこなふ」とも仰せられてゐる。

即ち「凡夫であるとの自覚」これは容易ならぬことであるとして強く教へられた。菩薩に十地があるが、第八地の不動地の菩薩に達して始めて、自ら凡夫であるとの自覚を得られる。自ら凡夫であるとの自覚が出来るから、その徳の自然として、あらゆる凡夫の、迷ひ、苦しみ、悩む、憂悲苦悩の姿を、一つ一つみながごととして感じて下さる。だから一切

の衆生に冥合して下されて、更に異つた趣が見られない。異つた趣とは、俺は道を得てゐるといふ風なところや、凡夫に同じて導いてゐるといふところが微塵もない、水に油が浮くといふところはなく、同入・和合・同融して下さるのである。

私はこのことを教へられて、今迄あまりにも怪々しく凡夫といふ言葉を弄して来たことが大きなあやまりであつたと身がしびれる程に感じさせられた。

親鸞聖人は「凡夫といふは無明煩惱われらが身にみちみちて、欲も多く、いかり、はらだち、そねみ、ねたむ心のつねにひまなくして、臨終の時まで、きえず、たえず、とどまらぬを凡夫といふ」と全く嚙んでふくめて下さるやうに教へて下されてゐる。その御言葉に対して反駁することは出来ないその通りでありますと一応うなづかされるが、それは頭だけで理解したのにすぎない。然しそのことが躰解されてはちつともぬない。

ある実業家が、近角常観先生をおたづねして「私は欲の深い浅間しい人間であります」と申し上げたとき、早速先生は

「欲の深い者だとそれ程知つてゐるのなら製品を薄利で売つてゐるのだらうな」ときびしく叱られたと承はる。

私共が「自分は凡夫である」と言ふ時、唯思考の上でそう言つてゐるにすぎない、浮調子なオームの口眞似である。ことに「凡夫だから」となると自分の悪を自分で許す口実にし、相手にもそれを認めて貰ふための合言葉にすぎない。

眞に「自分は凡夫である」との自覚があるなら、他人の悪に対しては理解ある同情の態度があらはれるはずである。然し私は人様の愚痴話を聞かされると、一度や二度は我慢しても三度四度となると、あまりにしつこい、といふやうに相手をさげすみ、極端な嫌悪の態度となる。そして自分はあれ程の愚痴はいはない、もうすこしはあきらめがよいといふ慢心と、相手の愚痴の強さに自分がやりきれなくなる氣持への回避、即ち利己心がそう言ふ態度として現はれる。

斯る私は他に対してさうであるばかりでなく、毎日言ふことと爲すことが、自分はよい、何処か世間の一般よりは取柄のある人間だといふやうな思ひが常に心の奥にこびりついて離れない。その反面には自分の体面といふことを常に苦にしてゐる。私の言行の一切は自己の体面を基盤としてゐるので、悪そのものをあさまいとは思へない、それによつて自己の体面がつぶれることをおそれてゐるにすぎない。腹立ちにしても腹立つことがあさまいとは思へないので、腹を立てると相手が自分を捨て、自分の悪口をふりまき、世間から嘲けられるだらうといふことが苦の種になつてゐる。

以上、内にも外にも、全く「自分は一介の凡夫である」との自覚は毛頭出来てゐない。佛語のオーム返しに、凡夫、凡夫と口先で言ひ、頭でわかつた積りであるのに過ぎない。眞の凡夫であつて、凡夫であるとの自覚も出来ない、と告白する外はない。

「共に是れ凡夫のみ」との聖語もその通りである、その通りであるが、それがそれと自覚することが出来ないのである。

ここに親鸞聖人が數異抄九章において「しかるに佛かねてしろし召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は、かくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよいよ頼もしくおほゆるなり」と仰せ下さることに刮目させられる。「煩惱具足の凡夫」

とは、私共が自覚することではなく、また金輪際出来ないものであるが、佛と八地以上の菩薩がその御自覚を持たれて、佛と菩薩において、遠い昔からよくしろし召して下されて、「煩惱具足の凡夫」と仰せ下さる。仰せ下さるのは、私共がその自覚が出来ないからこそ仰せ下さるのである。

ここに聖人の仰せがピタリと身に滲みて參るのであります。「自分は凡夫である、凡夫のあさまいさである」などと一角わかつて居る積りのところに「凡夫往生の本願、凡夫直入の眞心」と聞かされても、その一角わかつた積りが、一向に躰解されてゐないのであるから、地盤の悪い場所に家を建てたのと同様でグラグラと浮動し、傾きかけて来る。

「佛かねてしろし召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたるこ



となれば」とは、煩惱具足の凡夫との自覚の出来ない私に、聖人が出来ないことをよく知りし召して、佛のしろし召すところとして仰せ下さるのである。

すでに凡夫にして凡夫としての自覚の出来ない私こそ本願の御目当である。「他力の悲願はかくの如きのわれらがため」と聖人が御身に掛けて仰せ下さるのである。

大無量寿經の五惡段を想到する。元來この經は阿難尊者の驚ろきにこたへ給うて説かれたのであるが、人間の殺し合ひ、だまし合ひ、愛欲に狂うて父母にそむき、財産を湯水のやうにつかひ、權勢に倚つて人をひどい目にあはせるといふ様な五惡の相を佛が説かれるところでは「佛、彌勒菩薩に告げ給はく」となつて対告主は阿難尊者でない。このことは声聞位の阿難には未だ凡夫の自覚がないから、凡夫の実相を説かれる段になると菩薩の最高位にある彌勒菩薩に佛は説かれてゐる。然も彌勒菩薩は佛語の一語一語を、いかにもその通りでありますとうべなつて居られる。

こゝにいふところから頂きまして「佛かねてしろし召して」と聖人が仰せ下さることは、佛と八地以上の菩薩が明らかにあかしせられたことを聖人が信知せられて、私共に告げしらしめて下さるのである。

こゝに「他から仰せ下さる」ことが誠に有難いことである。「よき人の仰せ」と言ひ「有縁の知識」と讃へられてあるが、佛がかねてしろし召して仰せ下さることを、すつかり駄目な私に持ち込んで下さるのがよき人の仰せである。飽くま

のと同様である。そしてどうしてもそのところがとけないで聖人に訴へたのであるが、聖人の仰せにさめせられて見ると、自分が凡夫であることを忘れて、あれこれとはからうて苦しんでゐたので、凡夫にして凡夫の自覚さへなし得ぬ者をこそ「かねてしろしめし、ことに憐れまれてゐる」ことを知らしめられて、今迄のわるあがきや、りきみや、歎きが自然に解消させられて「いよいよ大悲大願はたのもしく往生は決定」と自然に信知せしめられたことであらう。

さて無限の大悲大願に、凡夫にして凡夫の自覚さへなし得ない者が、自然にやすらがしめられてゆくといふことは全く大変な出来ごとである。

故安波動八医師が、近角先生の御教化によつて信に入られ不幸にも胃癌の宣告をうけられて念佛往生を遂げられたのであるが、其時の信境を「死の宣告を受けて」の題で發表せられてゐる。其の最後の章において「信仰は三世に互り凡てが肯定せられる世界なり」といふ驚くべき金言を残されて、南無阿彌陀佛を意訳すると「成程さうだ」であると誌されてゐる。

でも無自覚の私故に、その私をこそ無限にあはれみ、哺くみ悲しんでやみ給はぬ広大無辺の佛心をとどけて下さるのである。

「他力の悲願は、かくの如きのわれらがためなり」といふ「たのもしくおほゆるなり」

「かくの如きのわれら」とは、凡夫にして凡夫の自覚さへ出衆ないわれらである。その者をこそ捨てじ、呆れじ、離さじとの無限の大悲を告げしらしめて下さるのである。この聖人の周到なる御恩によつて「われらがためなりけり」としられ、て」參るのであります。

ここのところをたとへて言へば、夢の中で大河に出遭ひ、どうして渡らうか、こゝして渡らうかと大いに努力する、あまり力を入れるので苦しむうなる。すると隣りの人がゆりおこして下さる。ホツトさめて見ると、元來夢で苦しむ力んでゐたのであるから、その力み心が自然に解消してやすらうて来る、そこに「いよいよ頼もしく覚ゆるなり」の信境がひらけて来る。

唯円坊にして見れば「念佛申し候へども、踊躍歡喜のこころおろそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたき心のさふらはぬはいかにてさふらふべきことにてさふらふらん」と聖人の御前に投げかけたのであるが、この唯圓坊はよろこべぬ、いそぎまゐりたき心のないことを如何ばかり苦し歎き悲しんだことであらうか。丁度、夢に大河に遭ひどうして渡らうか、こゝして渡らうかと一生懸命に努力し苦しむ

る。  
「成程さうだ」の一句の中に一切善惡の凡夫の罪業を皆わがこととして感ぜられてゐる。然もかかる広大な信境は、その罪業の隅々までも無限の大悲に満ち足らはしめられるからひらけたのである。

「衆流に冥合して更に異趣なし」といふやうなことはもとより我々の境涯ではないが、佛がかねてから「凡夫の自覚なき凡夫」と見てとつて下さるのだから、あへて凡夫を飾ることは不要となる。この一寸した心のゆとりが私共の生活の上には大きな影響をもたらすのである。

太子憲法の「我独り得たりといへども衆と共に同じくおこなふ」といふ教がほの見えて来るのである。然しすでに私共は真正正銘の凡夫であるから、何時も濁らされづめである。柳の下に何時も泥鰌が居るとは限らないが、佛力の不思議として「成程さうか」とうなづかせて頂くことも出来るといふものだ。

# 歎異抄八・九章講話(続)

福島政雄

## 第九章後半

また淨土へいそぎ参りたき心の無くて、いささか所勞のこ

ともあれば死なんするやらんと心細くおほゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫より今まで流転せる苦惱の舊里は棄て難



く、禾だ生れざる安養の淨土は恋しからず候ふこと、まことによくよく煩惱の興盛に候ふにこそ、名残り惜しく思へども娑婆の縁つきて力なくして終るときに彼の土へは参るべきなり。いそぎ参りたき心なき者をことに憫みたまふなり。

これにつけてこそいよいよ大悲大願は頼もしく往生は決定と存じ候へ。踊躍歡喜の心もあり、いそぎ淨土へ参りたく候はんには、煩惱の無きやらんとあやしく候ひなましと云々。これは死ぬるといふ問題、一体宗教といふものがさうでありますけれども、佛教といふものは殊に死といふものを問題にする。生老病死といふやうな事をいひますが、死の問題を解決するといふことは非常に大事な苦しい問題だところいふふに佛教の方では言はれてをる。

私共の現実相はどうかと言ひますとなるべくその問題をさげやうとするのであります。変な迷信でありますけれども日本人といふものは四をきらふのであります。死ぬるゝと音が通ふから四をきらふ。西洋人は十三をきらひまして西洋の宿屋では十三号室といふのは抜きにしてあるやうであります。それは迷信でありますが人間が死ぬることをきらふあらはれであります。そんなことで死ぬるといふことは皆が嫌う、それで私共は迷信といふものを超越するのが本当でありますけれども、例へば変な事でありませうけれども、私が書物を読みかけまして四頁の所になつて読みさしにするといふやうな時には大抵次の五頁まで読んで五頁で読みさしにする、そこに迷信的な心持ちが私に動くのであります。それは私が四頁で

半年のものだらつと宣告を受けました。その宣告を受けてみますると、かねては死といふ問題を、悠々たる氣持で解決出来たつもりでやつたものが、生も死も、天のまにまにと思つてゐたが、それは無事大平の病氣も何もない時の心持で、いよいよ死ぬるといふことを宣告されてみると、心持がすつかり違ふといふ歌がありますが、その歌に非常に私は感じてをるのであります。

實際この死といふものを目の前にひかへるといふことになると、そんなつもりではなかつたといふことになる。徳川時代の誰の狂歌でありましたか「今迄はひとの事だと思つたに、おれが死ぬとはこいつたまらん」そんなものであります。死といふものが目の前にせまつてきたとなると覚悟が出来てゐると思つてゐたのが、一種の錯覚にすぎなかつたといふことが解つてくる。

さうでありますから戦犯で巢鴨であんなに裁判されて絞首刑になつたあの七人の人達も矢張り余程佛法を聞いて聞いて、それから心が落着いて死なれた。あの「平和の発見」といふ花山さんの本に書いてゐられる、かねて覚悟は出来てゐると思つてゐたが、存外さうではない。いよいよ絞首刑になるとなつてみると何処かに落着かぬ所がある。其処を佛法を聞いて聞いて始めて落着く心になつた。人間といふものはさういふものでありませう。非常に感激して、そして第一線に出て戦死するといふ時は存外氣が立つて死ぬるといふことが容易に出来るかも知れませぬけれども、靜かに落着いて死ぬ

読みさしにしておくと死といふことが早くくるだらうといふやうな馬鹿な事を何となく感じてをるのであります。成る可く死といふことを目の前に問題にすまいと感じますのが私共の現実相であります。

然し、どうしても死ぬるものは死ぬるのである。人間が六十を越える迄生きてをりますと、今度は餘命いくばくもなしといふことを感ずるのであります。以前は釈尊と親鸞聖人の眞中位、八十五歳位まで生きさうに思つてをりましたけれど、此の二三年、健康の調子が悪いものでありますからして、とてもさうは生きさうもない、七十迄生きさうか知らんと時々考へますが、さういふ時に死にたくないといふことを思つてをるわけでありませう。死にたくないといふことを思つてくる時には「自分の餘命いくばくもなし」と反対の事をいふものであります。さういつてゐる時には死ぬる覚悟が出来てゐるのではなくて死にたくない、さういふ感じを「自分の餘命いくばくもない」といふ言葉であらはず、これが老人の心理状態であります。

老人に向つて「まだお元氣ですから、なかなか八十九十まで長生きなさいませうよ」といふと、老人はお世辞からいつてゐるといふことを知つて居ながら喜ぶ。さういふ淺薄な心持を持つてゐる、御世辞を言はれると知つてゐても喜ぶ、それ程死を回避してゐるのであります。

### カサガタカ

長塚節といふ人の歌集を読みますと、あの人が喉頭結核になつて、喉頭結核だと医者に診断されて、餘命あと一年か一ることとはなかなか難かしい事でありませう。さういふ意味では総てを片付けてから靜かに毒を仰いだといふ支那北洋艦隊の司令長官丁汝昌はなかなか偉かつたと思ふのであります。さういふことはなかなか出来ない事でありませう。感激の第一線に死ぬることは出来ても靜かに一切を処理して敗戦の後に自分が責任を負うて死ぬる時だと思つて死ぬるといふことは非常に難かしいことでありませう。それ程人間といふものは死にたくないものであります。

もう十何年も昔の話になりますけれども、大阪に行きまして、学校の先生の集りに、釈尊について「大教育者の釈迦牟尼」といふ題で釈尊の事を話しまして釈尊の晩年、釈尊が七十三位になられた時に釈迦族がビルリ王のために全滅になつたあの話をしたことがあります。その話が終つて校長室に帰つて来ましたら、若い視学さんがイキリ立つてやつて来ました。「釈尊は釈迦族全滅の時、何故に自殺されなかつたのでせうか」と私に詰問した。私も氣が立つてゐましたから「人間はただ死ねばよいといふものではありませぬ」と答へますと、その視学さんは「そんなことを言はれると胸の中が煮えかへるやうに腹が立つ」と言はれる。私も暗唾したものではないと考へ「私も日本国が亡びる時にはよく考へて身を処さねばなりません」と答へ、その場はそれで済みませう。

その後十何年、昭和二十二年五月でありましたか、大阪府立の或る女学校から手紙が私の所に五月十日頃来ました。それによりますと、この度この女学校長になりました。就いて



は一度来て学校の生徒と同窓会の集りに講演して下さいとある。その手紙の主は十年前に私を叱つた人であります。これは行かなくてはならんと思つて十二日に行きました。校長さんは非常に頭を低く下けて「日本の国はこんなになりまして。私は前に貴方を叱りましたが、こんなに死なずに居ります」と言つて私にひどく頭を下げられた。そんな事もありました。

なかなか人間といふものは、死ぬべき時が解つても落着いて死ぬといふことは難かしい。何時か死ぬるといふことが本当であるが、これも問題でありまして、人間の普通の状態では矢張り第九章通り

「なごりをしくおもへども娑婆の縁つきて、ちからなくしておはるときに彼の土へはまゐるべきなり」

これが本当であります。それで終戦後すぐに伏見の桃山御陵に御参りして、御陵の前で腹を切つたといふやうな人もあります。私なんかは自分の心にある解決がついたら明治天皇の御陵にお参りしたいと思つてをりながら京都にをります間、とうとう心の解決がつかないで、こんな心では御陵にお参りは出来ないといふやうな事でも、つひお参りせず、そのまま横須賀に移つてしまつて今だにお参りしてをりません。つまり御陵の前で自害するといふことが必ずしも本当だと思はぬこともありすけれどもそれよりも矢張り自分の命が何となく惜しい、殊に終戦後になると、そんなに自分で自害なんか出来ない。そのくせ私

時に女の手なんか介抱されて死ぬべきものでない」とかねて言つてゐたさうでありますけれども、その臨終は存外そうでなかつたらしいのであります。そのことを門人が非常に残念がつてゐます。若林強齋が書き残してゐるものがあります。「実に残念なことだ、我々の先生であんなに言つてをりながら、御臨終はさうはいかなかつた。婦女子を近づけられた」といつてゐる。

然し中江藤樹先生のやうな人は特別の人であつて、普通の人間は死ぬる時に寂しくなる。戦争でも第一線で華々しく討死する時は威勢がよいであります。非常な手傷を受けて、病院に收容されて、だんだん死ぬるといふ時になると、多くの兵士は最後に「お母さん」と自分の母親を呼ぶ。「お母さん」と呼びながら死んでいつた。さういふ人が非常に多かつたと聞いてをります。つまり臨終に母親を呼ぶ心持といふものは「力なくしておはる」所謂それは弱者の臨終であり、中江藤樹先生の如きは强者の臨終であります。

大体私共は弱者であつて、なかなか藤樹先生のやうな死方は出来ない、死ぬる時になると、そんな寂しい氣持になつて、なつかしい母親を呼ぶかもしれないし、どんな姿で死ぬるかも知れない。だから如何にも、第九章は我々凡夫のありのままの姿を親鸞聖人がのべられてをりまして、矢張りここまですつてもらはなければ、私共は落着けない。藤樹先生のやうな死に方をせよと言はれたとしても、それは出来るものでないといふことになる。そうして「急ぎまゐりたき心なき

生活が行き詰つてきますと、死んでは悪いものかといふことはよく考へたものであります。然しそんなことを考へて見ましても考へるだけでありまして、子供の事を考へると、死んではならぬといふことになつて、なかなか死ねないといふことでありますからして、実際第九章のやうに、如何にも凡夫の心持をそのままに今日まで生きて来てゐるやうに思ふのであります。

「久遠劫よりいまだ流転せる苦惱の舊里はすて難く、いまだうまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく煩惱の興盛にさふらふにこそ。

名残り惜しくおもへども娑婆の縁つきて、ちからなくしておはるときに、かの土へはまゐるべきなり」

つい二三日前、私の子供がこんなことをいつてをりました。「西田幾太郎博士は世界的な哲学者と言つてもいいといふやうな人であつたけれども、いよいよ臨終といふ時は、奥さんに、抱かれて死なれたそうだ。中江藤樹先生はいよいよ臨終といふ時に、奥さんを別室に退けて、誰か斯道に任ずるものぞ、あゝと言つて死なれた。この両方を比較すればどうだらう」と言ひますと、私の家内が「それは西田博士は死なれる時に寂しかつたのだらう」と簡単に答へて居りましたけれども、実際にさうであります。

私が死ぬる時が来て、どんな死に方をするか解りませんが、けれども、死ぬる時は非常に心持が寂しくなるのであります。それで山崎闇齋なんかは非常に強い人で、「男子は死ぬるものを殊にあはれみ給ふなり」といふ大悲大願を我身に受けるといふやうな所で、始めてホツト息をつくといふやうなのが私共の現実相であります。だから歎異抄の全章のあちこちに感じましても結局私共が落着く所は第九章であると思ひます。

近角先生は、これは晩年非常にお氣の毒でありまして、昭和十二年の夏でありましたか御長男が盧山の戦で戦死をなされたのであります。先生は昭和十六年十二月の始めにおかくれになり、この五年近くの歳月、時々御話を伺ひに東京にいつたものであります。お話を一通り終つて、会館の後の部屋に御入りになつて、其処へ御目にかかりにゆきますと、何時も繰り返して私に言はれたことは「自分の今の心境は歎異抄第九章だ。どうも子供の戦死したことが、どうしてもあきらめられぬ」といふことを言ひつづけておいでになつたのであります。

それは理窟では近角先生程の信仰に徹底した方が御長男がなくなられたら、これを御縁にいよいよ御信心が深く、そして落着いてあきらめおいでになれそうなものだと、そんな理窟になりますけれども、矢張り凡夫としての現実はずうではない。子供が戦死をすればどうしてもあきらめられん。結局、歎異抄の第九章に落着くよりほかはないといふことを、しみじみ私にぢかに云つて下さつたのであります。

今考へてみますと、矢張り近角先生がさういふ姿を示されつつ昭和十六年に結局おかくれになつたといふやうなこと



が、非常に私の胸に暖かにひびいてくる。あれが山崎闇齋の云つておる如く、或は中江藤樹先生の如くに非常にハッキリした心持でおかくれになつたといふのなら、それは偉いとは思はれますけれども、私等はチョット取つき所がなくなるといふふうに感ずる所でありませう、けれどもそうでなくて、先生の御信心が凡夫の如何にも弱々しい所を示しつつ大正大

### 隨感斷片

故・医師

安波勳八

願の佛の誠を身に受けつつおかくれになつた。そこが無限に私をひきつける所である。  
この第九章はそういふ心持を遺憾なく親鸞聖人が御示しになつてゐる。最後の私の落着き場所は此処であつたかといふことを思ひますのであります。  
昭和二十五年八月十三日の夜、小谷善一氏宅にて

一、佛ははつきりして居る  
親の有難いのは實際の親があるからよくわかるが、佛様は形がないからどうもはつきりせぬと云ふ人がある。左様な人に私は次の実例を答ふるを常としてゐる。

大正十五年二月、合馬博士の御紹介で小倉の師範学校の教諭石橋先生に水崎で初めてお目に懸り御縁に合はせて貰つた。翌日石橋先生は八幡の眞田増丸先生の葬儀に参列しての婦る電車の中でお念佛を称へた所、たまたま隣に居たお婆さんが聞きつけて「あなたも眞田先生の葬式に参つたのですか、眞田先生のお友達でお医者さんに胃痛で悩んで居られる人があると云ふが、あなたは知りませんか」と問はれるので、昨日水崎で会つたことから私のことを話されたさうである。

若しも私の病氣が軽くて餘裕のある場合には、見ず知らずの人からお薬を頂いてもよいか、どうか、此のお薬は効くかどうか、が問題になるか知らぬが、今の私（胃痛の末期）にはそんな餘裕はない。唯々お婆さんの親切を有難く頂戴するばかりである。

此の何とも仕様のない、不治の病に悩める者を何とかしてよくしてやらうと云ふお婆さんの眞実が即佛である。このお婆さんの眞実が眞田先生の葬式を縁として、石橋先生の念佛を縁とし、お薬を通じて、私に届いて見れば、お婆さんの眞実は私には決してほんやりしたものではない、はつきりしてゐる。お婆さんの形はほんやりして居る、私は時折りお婆さんの顔形を想像して見るけれども、見たことも、聞いたことも、ないから、どんなお方か形には出て来ぬがお婆さんの眞実はハッキリして居る。

葉そのものは主治医から勧められて、予てから用ひてゐたものと同じであるが、それによつて、お婆さんに対する感謝の念はすこしも変りはない。

お婆さんの眞実はかねてからあつたのであるが、私に届かなければ力にならぬ。私に届くにはお薬と云ふ物質の縁を借らねばならぬ。何かの形を通して眞実が届いた時、始めて感謝の念が起り、力を與へられる。眞実が届いてみれば物質は大した問題ではない、葉の効くか効かぬは問題でない。発病以来、見ず知らずの人で私に眞実の心を運んで下さる方は小倉のお婆さんに限つたわけでない、外にも沢山あるに

「そうですか、それはよかつた、実は胃痛には山奥の岩手シヤがよいと聞いたから、送つて上げたいと思つてかねてから買つてあるが、何分お所が分らぬのでそのままにしてあるあなた済みませんが送つて上げてくれませんか」  
斯くて石橋先生はわざわざ小倉市外のお婆さんの宅を訪ねてお薬を小包にして届けて下さり、御手紙には右の事情がくはしく書いてあつた。

私は此のお薬と手紙を受取つた時うれしかつた、有難かつた、お婆さんの親切を感泣した。見ず知らずのお方がこの何とも仕様のない病氣に悩んでゐる者を、何とかして助けてやりたいと私のために運んで下さる眞実が有難かつた。ことにお薬を其時に買つたのでなくてかねてから買ひ求めて貯へてあつたことが有難い。

違ひない。然し私は有難く感じない、力を感じない。眞実が何かの縁によつて私に届かなければ私のものにならぬ、力にならぬ。

御信心とは、佛の眞実が何かの縁によつて煩惱具足のこの私に届くことである。佛の眞実を如何に間違ひなく正確に理解しても、佛の眞実が直接私に届かなければ力にならぬ。

大正十五年五月二十七日稿

### 二、信と知と

専門の知識を体得するには専門家に対する信が必要である例へば我々の眼には太陽が動いて地球が動かない様に見えるが、天文学者の説を信すれば太陽が動かないで地球が動くのであるといふ眞理を体得する事が出来る。それには専門家の言をその儘信する外に道がない。我々素人がいくら考へても眞理そのものは分らぬ。

然らば専門家が云ふから間違ひがないかと云ふにそうではない。専門家の言を信じて太陽は動かないで、地球が動くのであると知つてみると、凡ての天體の現象——日蝕、月蝕、昼夜の別、春夏秋冬の別等——が凡て説明がつくから益々専門家の説が信じられるのである。

信仰も亦さうである。我々素人が佛があるかないか、自分の性は善であるか悪であるか、幾ら考へても本當に分る筈がない。専門家の言をそのまま信じて佛の慈悲を体得し、自己の罪惡に氣付いて見ると、唯専門家が云ふからではない、凡ての心の現象、自己及び他人の心の現象がすべて了解せられ



る。佛の慈悲を認めないでは、自分の心の現象及び世の中に  
合点のゆかぬ事が多い。佛の存在がはつきりすることによつ  
て凡ての現象が肯定せらるる。そこで益々専門家の説が確か  
に信じられる。知は信によつて始めて得られ、信は知により  
て益々深められる。

大正十五年六月一日稿

### 三、初めて佛に會ふ

「自分の悪い所を見て悪いからいかぬと云はずして、その悪  
い所を何処までも同情して下さるお方があれば私は助かる、  
なければ助からぬ」といふ事は早くから分つたが「其佛があ  
るかないか、あれば証拠が見たい」これが二三年來の唯一の  
疑問であつた。

東京で近角先生のお話を聞いても、東陽和上の御教を受け  
ても、寺の説教の御縁に會うても、座談会で皆様のお話を聞  
いても、結局は「それでは佛は有る事になつたのか、無い事  
になつたのか」といふ疑問だけが何時も未解決のまま残され  
た。

大正十二年の春であつたと思ふ、或日、汚い話であるが、  
便所の中で計らずも此の問題が全く解決され、爾來信仰上の

問題について何らの疑問もなくなりしのみならず、凡ての日  
常實際問題について肯定出来る様になつた。私は此時初めて  
佛の眞実が私に届いたのであると信じてゐる。

斯様な佛が確かにあることが私に信ぜられた。其の理由は  
何であるか知らない、只然しその前後の心持を書いて見ると  
「佛が有るか無いか証拠を見たいなんて何処を探して居たの  
だ。確かな証拠があるではないか。近角先生が現に安心立命  
の生活をしてゐること、その事が佛の有る証拠ではないか。  
先生が人生問題に煩悶した時に、學問でも、理屈でも、何物  
でも解決が出来なかつたのが、佛に會うて初めて解決が出来  
た。佛に會うても絶対解決が出来ないならば、佛は無いもの  
か知れぬが、絶対的解決の出来てゐる事が、佛のある何より  
の証拠ではないか」

近角先生が安心して居られる事について何らの疑は無い。  
先生の思想の全體が私に分る事が信仰であるとすら考へた程  
である。然らば佛のある事は間違がない。先生が「俺は佛に  
あつたのだ」といはれた意味が初めて了解せられた。私もこ  
の時初めて佛に會ふ事が出来た。誠に不可思議である。

大正十五年六月二十一日稿

## 六<sup>リク</sup>牙<sup>ゲ</sup>の白<sup>ビヤク</sup>象<sup>ザウ</sup>

昔印度の高原に一人の狩人が住んでゐた。毎日森に入つて  
は鳥獸をとつて日々のたつきにしてゐた。或日のこと何時も  
のやうに山に入つて獲物を求めたがどうしたとかその日に  
限つて一匹の獲物もない。一心に山深く探し求めて知らず知  
らず山奥に入りこんでしまつた。

フツ氣がつくと陽は西山に沈みかけてあたりはずでにホノ  
暗くなりかけてゐた。帰途についたが程なく太陽は没して下  
ひ、樹々の茂みの中に一寸先も見えなくなつて、道に迷つて  
しまつた。

狩人は萬策つきて山奥に一夜を明すことに腹をきめた。然  
し夜ともなれば猛獸の遠吠えが段々身近く迫り、毒蛇の匂ひ  
よるのも見分けることが出来ない。「嗚呼自分は今日まで毎  
日毎日数知れぬ鳥獸を殺して来たが、今夜こそは自分が殺さ  
れる日が来たのか」と悲しみ歎いてゐると、大石でも打ちつ  
けるやうな音が段々と近づいて来る。大きな白象である、狩  
人は氣絶せんばかりに驚き震へてゐると白象は優しく話しか  
けた。

「狩人さん、路に迷つたと見えるね。こんな所で一夜を明し  
たら猛獸か毒蛇のために殺されるに違ひない。わしはさつき

## ジャータカ物語

からそれを知つてあなたを救ひに来たのだ。

心配することは無い。わしの背に乗りなさい、わしが村へ  
出る道を教へて、家にとどけてあげるから」

狩人は段々に白象の優しさが知れて来て象の背に乗ると、  
六本の美しい牙が夜の目にもきれいにうつる、世にも稀な白  
象であつた。象は黙つて山路を急ぎ数時間の後に村の家の灯  
がチラチラと見える所まで来ると、

「狩人さん、あれが村だ、ここまで来るともう大丈夫だから  
独りでお帰り」

と告げた。狩人が背から下りると白象は再び森の暗闇の中  
に姿を消して行つた。狩人はその後姿を拜みながら、象の優  
しい心で救はれたことを夢かとはばかり喜び、何時までも白象  
の去つた方角を合掌して拜み、一生この恩は忘れまいと心に  
誓つた。

その後であつた。其の地方を治めてゐる王の妃が或夜夢を  
見た。それは立派な六本の牙を持つた白象の夢であつた。妃  
は夢から醒めて王を起しその話をして「あの立派な六本の牙  
で首飾りを作つたらどんなにか美しいであらう」と言つた。  
王は何分にも夢の話であるからよい加減に相槌を打つてゐた



が、その後妃はその夢がどうしても忘れられず、白象の牙が欲しくて欲しくてたまらなくなつて度々王に歎願した。王も始めの程は夢の話であり六本の牙の象など居るとも思へないので相手にしなかつたが病みつかんばかりに求めてやまぬ妃の心を憐れんで国内の各所に揭示をさせた。

「若し国内に六牙の白象を知つて居る者は速やかに王に知らせよ。通告者には莫大な賞與を興へるであらう」

と。この稀らしい揭示の前に人々は集つて色々の噂がたつた。狩人は始めてそのことを知つた時は、自分の生命の恩人である白象をどうして王に告げることが出来やうか、そうした眞似をしたら誠に人非人であると心に深く秘めて居た。

然し街や村の人々の噂が高まるにつれ、また度々揭示を見るにつけて狩人の心は次第に賞與の方に心がひかれて行つた。まてまて、自分以外に白象を知つてゐる人がないとも言へぬ。若し其の人が王に告げたら賞與は取られ白象も殺されて了ふにきまつてゐる。それでは自分は切角知つて居りながら馬鹿を見るに違ひない、それでは残念なことだ。かう言ふ風に狩人の心は欲心に段々と染みこんで行き、遂に、思になつたとは言へ相手は動物である。人間であれば何処までも秘しておかねばなるまいが、動物でもあるし、誰か何時かは白象を見出して王に告げるに相違ない、して見れば自分が早く王に申し出て賞與を沢山貰つて一生を安穩に暮すことにしやうと、遂に欲心に負けて了うた狩人は、王に六牙の白象の一件を申し出た。然し自分の救はれたことは秘してゐた。

声も出なくなつた。狩人の生命は風前の燈火である。その危機一発の時に、白象は力一杯に再び起き上がり、群象を制止すると、ピタリと群象はそこに立ちすくんだ。

毒矢に傷つた白象がよるめき乍ら狩人の近くに來て、チツト見て居たが、

「お前は数月前、救つてやつた狩人ではないか。何故に恩を仇でかへすやうなことをするのか」

と狩人を叱りつけた。狩人は無我無中に

「わたしが悪かつた、どうか助けて下さい。実は宝物に目がくれて恩人を売つたのです。わたしが悪いのです」

と泣き叫んだ。白象はジツト憐れな狩人を見下しながら、「自分は実は菩薩である。今白象として生れ象の王となつて修行を続けてゐるのだが、これも人々が貪慾のために狂はされて、恩人をさへ殺さずには居られない程に迷ひきつて罪を重ねてゐるのが不慙なばかりに、人々から三毒の矢を抜き去つて、清浄な世界に救ひ上げたいとそのことを一途に願つて、修行を続けてゐるのだ。サアお前はこの六本の牙が要るのだらう。わしが抜いて與へやう」

と言ひ乍ら白象は巨木の幹に牙を打ちこんで一本づつ、抜き取り、これを狩人に與へると共に、根も精もつきて其処にパツタリと倒れて息絶えて行つた。

然し狩人が飽迄も慈悲深い白象の眞心にうたれて、始めて我身のあさましさにあきれ、泣き伏してあやまらうとした時更に驚いたことは、天の音楽は自然に響いて、天華は無数

王と妃は非常によるこび、莫大な賞與を興へると共に、沢山の狩人を集め、その狩人に白象狩りをするから是非案内せよ。若し打ちとることが出来たら更に多くの賞與をあたへるであらうと約束した。

狩人はもうこうなれば王の命令であるから逃れる術もなく、且は沢山の宝物が貰へるとのことに慶び勇んで山奥深く白象を求めて入つていつた。

然し狩人は独りで考へた「あの白象は優しい心の上に智慧もすぐれてゐるから沢山の狩人で物々しく行つたのでは何処かへ逃げてしまふにきまつてゐる。これではいかぬ」といふので沢山の狩人はそこに止めておいて、自分独りは修行者の着物をつけて、その下に猛毒のある矢をかくし、山奥に入つていつた。

やがて狩人は遙かの森の茂みの中を悠々と歩んでゐる白象を見出した。狩人は修行者になりすまして段々に白象に近づき、丁度よい所まで近づくとかくし持つた毒矢を射て白象の急所を刺した。白象にはかの攻撃者にあひ毒矢が深く刺されたので大きなウメキ声をあげてそこに崩れかけた。狩人はシメタとばかり狂喜して、仲間の人を大声で呼ぼうとした時、驚いたことには、白象の一声に無数の象が砂煙をあげて飛んで來て、象王の仇とばかり狩人におそひかかつて居る。

今まで白象ばかりに目がくれて、附近に群つて居た他の無数の象に氣付かなかつた狩人は、一時に震へ上がつてしまひ

に降り注ぎ、白象の姿からは金色の光明を山全体に放ち乍ら淨界に消えて行つたことである。

残された六本の象牙を押し戴き押し戴き、涙と共に狩人は白象の御恩を生涯謝し続けていつた。

「諸の苦毒の中にあつて、われ精進を行じて、忍んで終に悔いざらん」との菩薩の御苦勞の姿が浮び上がつて私の心に深く刻まれる御話であります。

この佛陀の前生譚を私が始めてお聞きしたのは滋賀縣能登川町の發願寺様である。十年も前、法味に涙せられつゝ、故・那須野一乗法師から承つたのであります。貪愛の心常に善心を汚し、大恩を仇にしてかへす狩人の姿こそ、そのまゝに私の醜い心中であります。又恩を仇にかへされ身は亡びつゝも、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒に迷ひ狂ひ溺れ行く我等の罪業の根元を見抜いて、その故にこそ身を捨て、慈悲を成就して下さる菩薩「六牙の白象」の姿こそ、無限の大悲、けたはづれの大慈でありまして、かかる廣大無辺の御眞実の御心の前に遂に我身の一切を投げ出して懺悔申すばかりであります。

### 君は泣いた ツルゲネフ 詩

君は泣いた、私の不幸に。君の同情が身にしみて、私も泣いた。

だが君も、自分の不幸に泣いたのではないのか。それをただ私のうちに見ただけではないのか。



# 編集後記

今度マツクアーサー元帥の証言の中に「欧米人が四十七歳とすれば日本人は十二歳の程度である」との言葉がありました。物の値段は買手が決定するので、我々には何とも言へませぬが、我々の生活程度が元帥には十二歳の少年に窺つたのでありませう。このことは我等は深く省みなければならぬことと思ひます。戦時中に我国でも原子力の研究は完成に近かつたが大工業化することが遅れ、飛行機も極く僅かの高機能のものも出来てゐたが、大量生産が不可能であつたかに聞いて居ります。

日本の歴史を顧みましても、聖徳太子や法然、親鸞の両聖人のやうな方々も出られてゐるのであります。其の幽玄の思想信仰が広く地を潤はし難い所に、残念な点が多いと思はれます。僧俗共に深くこのことを反省し、一人一人の上に眞実の教の肉体化し具理化あれかしと念じつつ聞法いたしませう。

△福島先生の歎異抄九章の御講話は、死の問題を中心とされ、赤裸々な法雨を注いで下さいました。人將に死に臨んで、眞に力に下り光になつて下さるものこそ、我等の「つひのよりどころ」であります。万川が流れ流れて海に注ぐやうに、万人がそこに帰らしめられることで、特に第九章の後半こそは、そこに無限の光明を放つて攝取して捨て給はぬこ

とであります。御住所・横須賀市田浦局区内船越六六二番地。

△隨想断片は故安波医学士の胃癌の末期、死を眼前に据へての御記録で、著書の絶版されてゐることが誠に残念なことであります。謹んで三片の隨想を頂き未知の方々の座右にお送り申すことであります。今回は特に「佛の実在」に関する著者の体験と隨想を誌しました。

△「佛かねて知らしめして」は、狂人狂をしらぬ道理で、凡夫の故に凡夫の自覚すらなし得ぬ我等をこそ、佛菩薩において、かねてそのことを御覽覽下されて「煩惱具足の凡夫」と仰せ下さることの有難さを申し述べました。知らしめすが故に無限の慈悲を注いでやみ給はぬのであります。

△「六牙の白象」は佛陀の前生譚から引用しました。岐阜縣の法友、高木克己師から原書を拜借出来ましたことを厚く謝し、今後も同書から引用させて頂きます。

我が国書

## ★白井成允先生新著書紹介

### 歎異抄頌解

定価、二六〇円  
送料、二〇〇円

発行所、東京都文京区高田豊川町三七、大藏出版株式会社。振替東京五一六八四番。

先生の序文の一句。

歎異抄は私にとつて生命の書である。それによつて若かりし日、生死の惱みから救はれてより四十年、私の喜びも悲しみもすべて其の中に攝めとられてきた。今その頌解を述べ

る縁を興へられて感限りない、云々。

## 法縁照会

- ◇毎月第一、三日曜午後一時半。一道会館、法話会
- ◇毎月十五日午後六時、市内新栄町五ノ二五宗四寺。坐談会。担当花田。

昭和二十六年六月十日 印刷	昭和二十六年六月十五日 発行	毎月一回十五日発行	定価 一部金拾五円(郵税共) 一年分金百八拾円(郵税共)	名古屋市南区駈上町二ノ二八 編集兼 花田正夫 発行人	名古屋市千種区千種町馬走二八 印刷人 本田政雄	名古屋市千種区千種町馬走二八 印刷所 千草印刷所	名古屋市南区駈上町二ノ二八 一道会館	発行所 慈光社 振替口座番号 名古屋一〇四七〇番
---------------	----------------	-----------	---------------------------------	----------------------------------	----------------------------	-----------------------------	-----------------------	-----------------------------